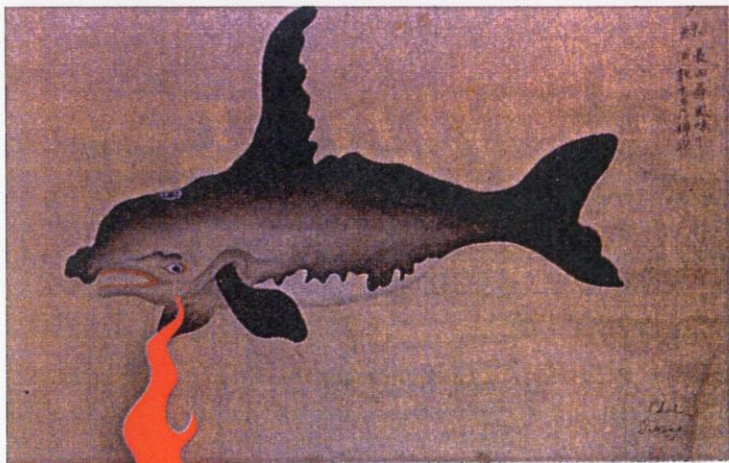




蘭学者・高野長英が描いたサカマタ鯨の図。
【高野長英記念館】 図JR「水沢駅」から徒歩約10分
☎0197・23・6034



他の弟子の論文などからも得たシーボルトの鯨知識は、シユ

呼びよせることになるとは露ほども知らずに。

「蘭学者の高野長英が、日本の歴史を大きく動かすきっかけをつくった人物であることは、あまり知られていない」と荒俣団長は言う。
長英は岩手県奥州市水沢の出身。江戸で学び、長崎にいたシーボルトに弟子入りしていた時代に、各地を調査して「鯨ならびに捕鯨について」という卒業論文を書いた。それが不思議な縁の発端となり日本に黒船を



黒船を呼びよせた
高野長英の卒業論文



※高野長英記念館からの補足説明
当時、アメリカでは鯨の油を「ランプを灯す油」や「機械の潤滑油」として必要だった。それでペリーは黒船の進路を日本に定めた。

呼びよせること
になるとは露ほども知らずに。
調査して「鯨ならびに捕鯨について」という卒業論文を書いた。それが不思議な縁の発端となり日本に黒船を

「これに注目したのが当時、太平洋で盛んに捕鯨をしていた米国です。極東に捕鯨基地を求めていた彼らは、近海に鯨が多い日本に針路を定めたのです」と団長は言う。
かくてペリーが黒船4隻を率いて来航する。長英は、ペリー来航の3年前に亡くなるが、この事実を知ったらどう思ったか。

長英の卒論は失われているが、彼の業績には、奥州市の高野長英記念館で触れることができる。
レーゲルの『日本動物誌 海獣部』として、ヨーロッパで発表される。



トランヴェール 2019年8月号より転載
監修：荒俣 宏
協力：大石雅之（元岩手県立歴史博物館学芸員）
文：高橋盛男
写真：鶴田孝介
制作：株式会社レマン